

DB2 Universal Database バージョン 8.1.2



リリース情報 (バージョン 8.1.2)

バージョン 8.1.2

DB2 Universal Database バージョン 8.1.2



リリース情報 (バージョン 8.1.2)

バージョン 8.1.2

ご注意!

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、39 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： DB2 Universal Database Version 8.1.2
Release Notes (version 8.1.2)
Version 8.1.2

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2003.4

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2002. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2003

目次

リリース情報について	vii	デベロップメント・センターの Windows 98 オペレーティング・システムのサポート	10
2 バージョン 8.1.2 の新機能	1	デベロップメント・センターが OS/390 ま たは z/OS サーバー上で実行される SQL ステートメントの実コスト情報をサポート	10
2 Windows の機能強化	1	連合システムの制約事項	11
2 Linux の機能強化	2	DB2 Universal Database Workgroup Server Edition に組み込まれた高可用性機能	13
2 Informix の統合	2	Microsoft Visual Studio .NET 用の DB2 Development Add-In	13
2 ビジネス・インテリジェンス情報	2	Linux でのインストール	13
2 DB2 Express	3	ライセンス・センターのバックレベル・バ ージョンの非サポート	14
2 製品における変更	3	Microsoft Visual Studio、Visual C++	14
2 パフォーマンスの強化	3	64 ビット・オペレーティング・システムで 必要な Microsoft XP のフィックス	14
2 ユーザビリティの強化	3	MVS オペレーティング・システムの非サ ポート	14
2 DB2 for z/OS の機能強化	3	Solaris オペレーティング環境および Windows Server 2003 上でのDB2 XML エ クステンダーのサポート	15
2 アプリケーション開発の機能強化	4	Windows XP オペレーティング・システム アプリケーション開発	15
確認済みの問題とその対処法 (バージョン 8.1.2)	5	CLI の非同期実行	15
製品および製品レベルのサポート	5	Windows 64 ビット・オペレーティング・ システム上の CLI および ODBC	15
1 代替フィックスパック	5	構成アシスタント	15
バックレベル DB2 サーバーのサポート	5	サポートされないバインド・オプション	15
DB2 Universal Database バージョン 7 サー バー・アクセス	7	構成パラメーター	16
クラシック・コネクトは使用不可	8	複数パーティションのデータベース上の NUM_LOG_SPAN 構成パラメーター	16
データウェアハウス・センターは中国語 (簡 体字) では使用しない	8	DB2 バックアップおよびリストア	16
データウェアハウス・センターの下位レベ ル・サーバーのサポート制限	8	Linux 390 オペレーティング・システム上 のバックアップおよびリストア	16
1 DB2 Administration Server (DAS)	9	DB2 Data Links Manager	16
DB2 Workgroup Server Edition 用 DB2 ライ センス・ポリシー	9	Data Links サーバーのバックアップは、 Tivoli Storage Manager アーカイブ・サーバ ー (AIX、Solaris オペレーティング環境) を使用しない	16
DB2 Web ツール	9	DataJoiner またはレプリケーションの使用時の	1
DB2 Warehouse Manager は中国語 (簡体字) では使用しない	9	DB2 の移行	18
2 DB2 UDB Version 6 for OS/390 および			
2 DB2 UDB Version 7 for z/OS での SQLJ			
2 および SQL アシスタントのサポートに必 要なデベロップメント・センターの APAR	10		
64 ビット・オペレーティング・システムで のデベロップメント・センターの制約事項	10		
2 Intel 32 ビット Linux オペレーティング・			
2 システム上のデベロップメント・センター	10		

DB2 レプリケーション	18	GUI ツールの最小限の表示設定	25
DB2 データ・レプリケーション用の Java		AIX での GUI ツール使用時の SQL1224N	
管理 API ドキュメンテーション	18	エラー	25
列マッピングの制約事項およびレプリケー		ヘルス・モニター	26
ション・センター	18	デフォルトでのヘルス・モニターのオフ	26
iSeries システムでのレプリケーション・セ		ヘルス・インディケーターの制約事項	26
ンターの制約事項	18	複数フィックスバック環境での dasdrop の制	
1 レプリケーション asnsrct コマンドの対処		約事項	26
1 策 (Windows のみ)	19	インフォメーション・カタログ・センターの	
データウェアハウス・センター	19	表	27
ERwin 4.x メタデータ・ブリッジ	19	2 インフォメーション・カタログ表は区分化	
リモート・オブジェクトの日本語名	19	2 しない	27
Clean Data トランスフォーマーの制約事項	20	1 Windows の保護環境	28
レプリケーション用のウェアハウス・エー		SQL アシスタント	29
ジェントの使用および Client Connect ウェ		コマンド・センターでの SQL アシスタン	
アハウス・ソースへのアクセス	20	ト・ボタンの使用禁止	29
インターバルを設けられたウェアハウス・		DB2 から起動される 2 つのバージョンの	
プロセスの実行のスケジューリング	21	SQL アシスタント	29
ドキュメンテーション	21	2 スロットル・ユーティリティの制約事項	29
DB2 レプリケーションのガイドおよびリフ		XML エクステンダー	29
ァレンス・ドキュメンテーション	21	2 XML エクステンダー・サンプル・プログ	
DB2 バージョン 8 HTML ドキュメンテー		2 ラムの名前変更	30
ション・インストールの制約事項		パーティション・データベース環境内の	
(Windows)	21	XML エクステンダー	30
1 AIX ではドキュメンテーションの全カテゴ		追加情報	31
1 リーをインストールしていないとドクユメ		Unicode サーバー動作の変更	31
1 ンテーション検索が失敗することがある	22	SQLException.getMessage() 使用時に全メッ	
1 Java 2 JRE1.4.0 でのドキュメンテーション		セージ・テキストが戻されない	31
1 検索の問題	22	IBM DB2 汎用 JDBC ドライバー	31
インストール時のオプションにない言語で		UNIX および Windows オペレーティン	
の DB2 インフォメーション・センターの		グ・システムでの Java 関数およびルーチ	
インストール	22	ン	32
1 ホスト・システムでの使用時の DB2 for		翻訳版の MDAC ファイルが最初にインス	
1 Linux の正式名称	23	トールされていない場合に DB2 V8.1 のす	
GUI ツール	23	べての各国語版で使用される英語の	
コントロール・センターのプラグインのサ		Microsoft Data Access Components (MDAC)	
ポート	23	ファイル	32
DB2 GUI ツールでのインド語文字の表示	24	AIX オペレーティング・システムでの中国	
Linux オペレーティング・システムが稼働		語 (簡体字) ロケール	32
する zSeries サーバーでの GUI ツールの		オンライン・ヘルプの修正および更新	35
非サポート	25	SQL ストアード・プロシージャの C 環境	
列のロードおよびインポート・ページでの		をデベロップメント・センターで構成	35
IXF ファイル内の DBCS 文字の非サポー		2 Hummingbird Exceed を使ったデベロップメン	
ト	25	2 ト・センターへのアクセス時のビュー連結の	
ロード操作の失敗時の誤ったインディケー		2 使用可能化	35
ターの表示	25		

2	デベロップメント・センターのヘルプでの	Spatial Extender - 索引アドバイザー使用時の	
2	Microsoft Visual Studio .NET アドインの情報	要件.	37
2	の更新.	Java ストアード・プロシージャのビルド・	
2	バージョン 8.1.2 への DB2 XML エクステン	オプションをデベロップメント・センターで	
2	ダーの移行.	指定.	38
	Java ルーチンをデベロップメント・センター		
	でコンパイル可能にするパスの設定.	付録. 特記事項.	39
	Runstats ダイアログ - 更新された到達情報.	商標.	42

リリース情報について

内容:

リリース情報には、以下の DB2 バージョン 8 の製品についての情報が記載されています。

DB2® Universal Database Personal Edition
DB2 Universal Database™ Workgroup Server Edition
DB2 Universal Database Workgroup Server Unlimited Edition
DB2 Universal Database Enterprise Server Edition
DB2 Personal Developer's Edition
DB2 Universal Developer's Edition
DB2 Warehouse Manager
DB2 Warehouse Manager Sourcing Agent for z/OS™
DB2 Data Links Manager
DB2 Net Search Extender
DB2 Spatial Extender
DB2 Intelligent Miner™ Scoring
DB2 Intelligent Miner Modeling
DB2 Intelligent Miner Visualization
DB2 Connect™ Application Server Edition
DB2 Connect Enterprise Edition
DB2 Connect Personal Edition
DB2 Connect Unlimited Edition

構造:

このリリース情報は、3 つの部分に分かれています。

最初の部分では、本リリースの新機能に重点が置かれています。第 2 の部分では、上記の最新バージョンの製品に影響を与える問題、制約事項、および対処法が、このリリース情報の発行時点で判明している限りにおいて詳述されています。これらの情報をお読みになり、本リリースの DB2 製品ファミリーの現存する既知の問題についての理解を深めてください。第 3 番目の部分には、製品の GUI ツールのヘルプに用意されている情報に対する修正と更新が記載されています。

2 最新のドキュメンテーションは、ブラウザでアクセスする最新バージョンの DB2 イン
2 フォメーション・センターに掲載されています。改訂マークは、バージョン 8.1 の
2 PDF 情報が最初に掲載された後に追加または変更されたテキストであることを示してい
2 ます。縦線 (I) は、バージョン 8.1 が最初にリリースされたときに追加された情報であ
2 ることを示しています。数字標識の 1 や 2 は、フィックスパックまたはこれと同じ番
2 号で終わるリリース・レベルで追加された情報であることを示しています。たとえば 1
2 は、フィックスパック 1 で追加または変更された情報を示し、2 は、バージョン 8.1.2
2 で変更された情報であることを示します。

1 フィックスパック 1 の時点で、PDF フォームの「*Data Links Manager* 管理ガイドお
1 よびリファレンス (SC88-9169-01)」が更新されましたが、これは DB2 サポート・サイ
1 トからダウンロードすることができます。

1 **UNIX ベースのシステム上で作動する Enterprise Server Edition (ESE) 用の複数フィ 1 ックスパック:**

1 UNIX ベースのオペレーティング・システム上で作動する DB2 Enterprise Server Edition
1 (ESE) のバージョン 8 では、代替フィックスパックの使用を前提とした複数のレベルの
1 フィックスパックの共存がサポートされています。

1 DB2 バージョン 8 以前はフィックスパックは、インストール済みのパッケージまたは
1 ファイル・セットに対する更新としてのみ機能しました。それは基本的に、O/S インス
1 トレーターによって既存のファイルがフィックスパックに備わった更新済みのファイルに
1 置き換えられることを意味します。今後は、DB2 ESE バージョン 8.1 コードと DB2
1 ESE バージョン 8.1 フィックスパック 1 コードを両方一緒にインストールできるよう
1 になりました。これが可能になったのは、UNIX ベースのオペレーティング・システム
1 では ESE 用のフィックスパックが 2 つになったためです。1 つは通常フィックスパ
1 ックで、これは /usr/opt/db2_08_01 または /opt/IBM/db2/V8.1 内の既存のインスト
1 ールの上部に直接インストールされます。もう 1 つは代替フィックスパックであり、
1 これによって、すでに適用済みのフィックスパックも含めて DB2 の完全に新規のコピ
1 ーが別のロケーションにインストールされます。代替フィックスパックは実動システム
1 と並行してフィックスパックをテストする際に使用するためのものであり、実動システ
1 ムそのものとして使用するものではありません。

1 **注:**

- 1 1. 製品はデフォルト以外のパスにインストールされているかもしれませんが、このドク
1 ュメンテーションで使用するインストール・パスはすべてデフォルトのパスを指定し
1 ています。
- 1 2. 複数フィックスパックのインストールは不要と思われる環境では、複数フィックスパ
1 ックのインストールを行う必要はありません。
- 1 3. 代替フィックスパック上への通常フィックスパックの適用のサポートは、現在計画さ
1 れていません。よって代替フィックスパックは、ご使用の実稼働環境と並行して使用
1 するためのものであり、基本実動システムとして使用するためのものではないとい
1 うことです。

1 代替フィックスパックのダウンロードについての詳細は、IBM サポート・サイト
1 <http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winosex/unix/support> を参照してください。

1 **追加リソース:**

1 DB2 Life Science Data Connect 製品の資料は、IBM ソフトウェア・サイト
1 <http://www.ibm.com/software/data/db2/lifesciencesdataconnect/library.html> からダウンロード
1 できます。

DB2 デベロップメント・センターと DB2 for z/OS についての詳細は、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/os390/spb/> に記載されています。

DB2 ファミリー製品の最新情報については、購読無料の *DB2 Magazine* を申し込んで
ください。このマガジンのオンライン版は、<http://www.db2mag.com> から入手できま
す。このサイトに、購読方法に関する説明もあります。

バージョン 8.1.2 の新機能

Windows の機能強化

プラットフォームのポータビリティとオープンネスの増強

DB2 UDB には、Microsoft® Windows® 2003 サーバーの新リリースのサポートが追加されています。しかも、Intel Itanium 2 プロセッサ・ベースのサーバー向けに最適化された 64 ビット・バージョンの新規の DB2 for Windows が配備されています。

Microsoft Visual Studio .NET のアドイン

これは、Visual Studio .NET 統合開発環境 (IDE) を使って、ストアード・プロシージャやユーザー定義の SQL 関数 (UDF) などの、DB2 サーバー側オブジェクトを作成するための ADO.NET アプリケーションを作成するタスクを単純化します。また、DB2 を用いてインプリメントされた Web サービスと、そのような Web サービスを呼び出す .NET アプリケーションとの間のインターオペラビリティも拡張されています。

管理された C# コードで書かれたネイティブ・プロバイダーである DB2 .NET Data Provider

これは、DB2 データへのハイパフォーマンスかつ安全なアクセスの手段となります。DB2 に用意された他のどのアプリケーション・プログラミング・インターフェースとも同じように、DB2 .NET Data Provider は、DB2 の真の理解者から成る DB2 開発組織によって社内開発およびテストされているので、ADO.NET プログラマー向けの DB2 の諸フィーチャーおよび機能の最大限の活用が可能になります。

ADO.NET API を使ったアプリケーション開発

アプリケーション・プログラマーは今後は ADO.NET API を使って、ハイパフォーマンスの WinForm、WebForm、およびモバイル WebForm アプリケーションを開発することができます。そのようなアプリケーションを開発すれば、Linux、UNIX®、および Windows、さらには DB2 for OS/390® and z/OS データベース・サーバー上で稼働する DB2 UDB V8.1 によって管理されるデータを処理することができます。DB2 UDB および DB2 Connect サーバーのストアード・プロシージャおよび連合データベース機能と一緒にそのデータ・アクセス機能を使用すれば、そのデータ・アクセス機能を拡張して、DB2 以外のメインフレーム・データ (VSAM、CICS、IMS など)、Informix™ Dynamic Server (IDS)、Microsoft SQL Server、Sybase、および Oracle® データベースなどの他の広範囲にわたるデータ・ソース、ならびに OLE DB Provider を利用できる任意のデータ・ソースを組み込むことができます。

2

2 Linux の機能強化

2

プラットフォームのポータビリティとオープンネスの増強

2

DB2 UDB には、以下をはじめとするこの業界のオープンな Linux のサポートが追加されています。

2

2

- Intel Itanium 2 をベースとするサーバー用に最適化された 64 ビット・バージョンの DB2 for Linux。

2

- Linux を実行する 32 ビット・バージョンの DB2 for IBM eServer iSeries™ and pSeries™。

2

- AMD Opteron ベースのサーバー用に最適化された 64 ビット・バージョンの DB2 for Linux もいずれ追加されることとなります。これに関しては、

2

<http://www14.software.ibm.com/webapp/download/search.jsp?go=y&rs=dm-db2betas>

2

に、64 ビットの AMD Opteron バージョンの DB2 for Linux のベータ・プログラムへの参画に興味をお持ちの顧客向けの解説が記載されています。

2

2

LDAP 機能

2

これは、IBM SecureWay® Directory バージョン 3.2.2 を使用する Linux IA32 および Linux390 に追加されました。

2

2

2 Informix の統合

2

現在 DB2 は、一連の Informix 製品から発行される SET ISOLATION ステートメントをサポートしています。

2

2

2 ビジネス・インテリジェンス情報

2

Query Patroller

2

現在 Query Patroller は、照会送信のあらゆる側面を管理および制御するスタンドアロン製品です。

2

2

データウェアハウス・センターおよび Warehouse Manager

2

今後は、Red Brick™ Warehouse と DB2 の間でデータをやりとりすることができます。

2

2

ヘルス・センター

2

ヘルス・センターの機能強化には、アラートのフィルターの改良、ソート・ヒープ・パラメーターでのヘルス・インディケーターのアラートとアクションに関する推奨事項の改善、および「アラート詳細情報 (Alert details)」ダイアログの拡張などがあります。

2

2

2

2

2

2 DB2 Express

2 DB2 Express は、世界各国の小規模および中規模の業務 (SMB) 顧客を視野に入れて特
2 に調整された製品です。つまり、顧客アプリケーション内での透過的インストール、有
2 利な導入価格、パッケージの簡素化、プラットフォームの選択、簡単に自動管理できる
2 機能、運用・保守での総コストの低減、ビジネス・パートナー・アプリケーション、お
2 よび SMB 顧客にとって価値のあるサポート時間の短縮が図られています。

2

2 製品における変更

2 IBM DB2 Information Integrator は、IBM DB2 Relational Connect、IBM DB2 Life
2 Sciences Data Connect、および IBM DB2 DataJoiner の後継製品です。

2

2 パフォーマンスの強化

2 スロットル・ユーティリティー

2 ご使用の実動システムに対する影響の制御を目的として、BACKUP や
2 REBALANCE などのユーティリティーを加減または統制することができます。

2 MERGE ステートメント

2 MERGE ステートメントを使用すれば、INSERT、DELETE、および UPDATE
2 操作を結合することができます。

2 ランダム抽出

2 TABLESAMPLE 文節は、データベースの確率標本に照らして照会を実行する
2 足がかりになります。

2

2 ユーザビリティの強化

2 カスタマイズ・フォルダー

2 今後は、コントロール・センターのオブジェクト・ツリーのビュー内にカスタ
2 マイズ・フォルダーを作成することができます。

2 インフォメーション・センターの機能強化

2 DB2 インフォメーション・センターは変更および拡張されて、組み込まれたラ
2 イブラリーの数が増加し、リンクの機能が改善されています。

2

2 DB2 for z/OS の機能強化

2 DB2 for z/OS での機能強化には次のものがあります。

- 2 • DB2 for z/OS のデータ・セットの管理を目的としたコントロール・センターの機能
2 強化
- 2 • CURRENT PACKAGE PATH 特殊レジスター
- 2 • より長い SQL ステートメント (2MB まで) のサポート
- 2 • INSERT からの SELECT のサポート

- 2 • SQL ステートメントの起点を特定する診断情報

2 アプリケーション開発の機能強化

2 アプリケーション開発の機能強化には次のものがあります。

- 2 • Java™ プログラマー
 - 2 - JDBC タイプ 2 ドライバーの新規拡張
 - 2 - J2EE サービスと Web サービスの機能強化
 - 2 - JTA (Loosely Coupled Transactions - 疎結合トランザクション) のサポートの改良
 - 2 - デベロップメント・センターの機能強化
- 2 • Microsoft プログラマー
 - 2 - Visual Studio .NET のアドイン
 - 2 - DB2 .NET Data Provider
 - 2 - OLE DB プロバイダーの拡張
 - 2 - COM+ (Loosely Coupled Transactions) のサポートの改良
- 2 • XML
 - 2 - DB2 データから簡単に XML 文書を作成するための SQLXML 関数の追加
 - 2 - XML エクステンダーの機能強化
 - 2 - XML スキーマのサポート
 - 2 - パフォーマンスの強化
 - 2 - パーティション・データベースでの XML エクステンダーの使用のサポート
- 2 • Web サービス
 - 2 - DB2 Web サービスを呼び出す Microsoft .NET アプリケーションのサポートの改良
 - 2 - HTTP サーバーと SOAP エンジンの統合
 - 2 - UDF としての SOAP の呼び出し
- 2 • SQL のサポート
 - 2 - MERGE ステートメント
 - 2 - SET ISOLATION ステートメント SOAP エンジン
 - 2 - VARGRAPHIC 列の長さの拡張を可能にする ALTER TABLE ステートメント
 - 2 - パーティション・データベース環境における IDENTITY 列のサポート
 - 2 - IBM eServer zSeries™ for Linux: Net Search Extender のサポート

確認済みの問題とその対処法 (バージョン 8.1.2)

以下は、DB2[®] Universal Database バージョン 8.1.2 フィックスパック 1 で現在判明している制限上の問題点とその対処法です。ここに記載されている内容は、DB2 Universal Database のバージョン 8.1.2 フィックスパック・リリースとそのサポート製品にのみ当てはまります。制限および制約事項は、製品の他のリリースでも該当するとは限りません。

製品および製品レベルのサポート

1 代替フィックスパック

1 代替フィックスパック上への通常フィックスパックの適用のサポートは、現在計画されて
1 いていません。したがって代替フィックスパックは、テスト・システムとしてのみ使用す
1 るためのものです。

バックレベル DB2 サーバーのサポート

すべての DB2 サーバーをバージョン 8 に移行する前に DB2 クライアント・システムをバージョン 8 に移行する場合は、いくつかの制限や制約事項があります。

バージョン 8 クライアントをバージョン 7 サーバーで処理する場合は、バージョン 7 サーバー上で DRDA[®]アプリケーション・サーバー機能を構成して使用可能にする必要があります。これを行う方法については、バージョン 7 の「インストールおよび構成補足」を参照してください。DB2 バージョン 8 クライアントから DB2 Connect[™] バージョン 7 サーバーにアクセスすることはできません。

バージョン 8 クライアントからバージョン 7 サーバーにアクセスすると、以下のものはサポートされません。

• 以下のデータ・タイプ:

- ラージ・オブジェクト (LOB) データ・タイプ
- ユーザー定義特殊タイプ
- DATALINK データ・タイプ

DATALINK データ・タイプを使うと、非リレーショナル・ストレージ内に置かれている外部データを管理することができます。DATALINK データ・タイプは、物理的に DB2 Universal Database の外部にあるファイル・システムに置かれたファイルを参照します。

• 以下のセキュリティー機能:

- 認証タイプ SERVER_ENCRYPT

SERVER_ENCRYPT は、パスワードを暗号化する手段です。暗号化したパスワードをユーザー ID と一緒に使って、ユーザーを認証します。

- パスワードの変更

バージョン 7 サーバー上のパスワードをバージョン 8 クライアントから変更することはできません。

• 以下の接続および通信プロトコル:

- 接続ではなく ATTACH を必要とするインスタンス要求

バージョン 8 クライアントからバージョン 7 サーバーへの ATTACH はサポートされていません。

- TCP/IP 以外のネットワーク・プロトコル。

(SNA、NetBIOS、IPX/SPX など)

• 以下のアプリケーション機能およびタスク:

- ODBC/JDBC 以外のすべてのアプリケーション用の DESCRIBE INPUT ステートメント

バージョン 7 サーバーにアクセスする ODBC/JDBC アプリケーションを実行するバージョン 8 クライアントをサポートするには、このタイプのアクセスが必要なすべてのバージョン 7 サーバーに、DESCRIBE INPUT サポート用の修正プログラムを適用する必要があります。この修正は、APAR IY30655 に関連しています。いずれかの DB2 ドキュメンテーション・セット (PDF または HTML) の『IBM® への連絡方法』を参照して、APAR IY30655 に関連する修正プログラムの入手方法を確認してください。

DESCRIBE INPUT ステートメントを使用すると、アプリケーション・リクエストは準備済みステートメントにおける入力パラメーター・マーカーについての記述を入手でき、パフォーマンスおよびユーザビリティが改善されます。CALL ステートメントの場合はそれには、ストアード・プロシージャー用の IN および INOUT パラメーターに関連したパラメーター・マーカーも含まれます。

- 2 フェーズ・コミット

バージョン 8 クライアントが関与する整合トランザクションの使用時には、バージョン 7 サーバーをトランザクション・マネージャー・データベースとして使用することはできません。また、バージョン 8 サーバーがトランザクション・マネージャー・データベースである場合には、バージョン 7 サーバーが整合トランザクションに関与することもできません。

- XA 準拠のトランザクション・マネージャー

バージョン 8 クライアントを使用するアプリケーションは、バージョン 7 サーバーを XA リソースとして使用できません。これには、トランザクション管理の一部となっている WebSphere、Microsoft® COM+/MTS、BEA WebLogic などが含まれます。

- モニター

- クライアントからサーバーに向けて開始されるユーティリティ

- サイズが 32 KB を超える SQL ステートメント

バージョン 7 サーバーと連動するバージョン 8 ツールには、同様の制限や制約事項があります。

以下のバージョン 8 GUI ツール、製品、およびセンターは、バージョン 8 サーバーのみをサポートします。

1

- コントロール・センター
- デベロップメント・センター
- ヘルス・センター (Web バージョンのセンターを含む)
- 未確定トランザクション・マネージャー
- インフォメーション・カタログ・センター (Web バージョンのセンターを含む)
- ジャーナル
- ライセンス・センター
- サテライト管理センター
- Spatial Extender
- タスク・センター
- ツール設定

以下のバージョン 8 ツールは、バージョン 7 サーバーをサポートします (制約事項あり)。

- コマンド・センター (Web バージョンのセンターを含む)
スクリプトの保管、インポート、およびスケジューリングは、コマンド・センターではサポートされていません。
- データウェアハウス・センター
- レプリケーション・センター
- 構成アシスタントのインポート/エクスポート構成ファイル機能
- SQL アシスタント
- Visual Explain

一般的に、コントロール・センターのナビゲーション・ツリーからのみ起動するバージョン 8 のツールや、そのようなツールを基盤とする詳細ビューはいずれも、バージョン 7 およびそれ以前のサーバーで利用したりそこにアクセスしたりすることはできません。バージョン 7 以前のサーバーで作業する場合は、バージョン 7 のツールの使用が可能かどうかを検討してください。

DB2 Universal Database バージョン 7 サーバー・アクセス

バージョン 8 クライアントから Linux、UNIX、または Windows® オペレーティング・システム上の DB2 Universal Database™ バージョン 7 サーバーにアクセスするには、

サーバーにバージョン 7 フィックスパック 8 以降をインストールし、**db2updv7** コマンドを実行する必要があります。バージョン 7 フィックスパックのインストール方法については、バージョン 7 フィックスパックの Readme およびリリース情報の資料を参照してください。

DB2 バージョン 8 クライアントから DB2 Connect バージョン 7 サーバーにアクセスすることはできません。

クラシック・コネクトは使用不可

クラシック・コネクト製品は、使用できません。データウェアハウスのドキュメンテーションやその他の場所で、クラシック・コネクト製品への参照がある可能性があります。が、もはや該当しないので無視してください。

データウェアハウス・センターは中国語 (簡体字) では使用しない

データウェアハウス・センターは中国語 (簡体字) では使用できません。

データウェアハウス・センターの下位レベル・サーバーのサポート制限

DB2 Enterprise Server Edition バージョン 8 データウェアハウス・センターの下位レベル・サーバーのサポートには、以下の制限があります。

ラージ・オブジェクト (LOB) サポート

- ウェアハウス・コントロール・データベースを DB2 Enterprise Server Edition バージョン 8 より古いサーバーで使用している場合、LOB での作業はできません。ウェアハウス・コントロール・データベースを正しいレベルにアップグレードするか、または DB2 Enterprise Server Edition バージョン 8 ウェアハウス・サーバーがインストールされ、システムからローカルで使用されているシステムにコントロール・データベースを移動する必要があります。
- LOB をデータウェアハウス・センターと DB2 間で移動したい場合は、DB2 Enterprise Server Edition バージョン 8 にアップグレードする必要があります。

SNA サポート

SNA を使用してウェアハウス・ソースおよびターゲットに接続する場合は、構成を SNA 上の TCP/IP に変更するか、または Windows NT[®] ウェアハウス・エージェントを使用する必要があります。

EXPORT および LOAD ユーティリティのサポート

ウェアハウス・エージェントをアップグレードする場合は、ソース・ターゲット・データベースもアップグレードするか、またはウェアハウス・プロセス内の EXPORT および LOAD ユーティリティを SQL Select および Insert ステップで置き換えなければなりません。SQL Select および Insert ステップは、DELETE* コマンド、続けて SELECT および INSERT コマンドを使用し

ます。SQL Select および Insert ステップには、すべてのトランザクションをログに記録するデータベースが必要です。結果として、SQL Select および Insert ステップのパフォーマンスは、EXPORT および LOAD ユーティリティ一用のものほど効果的ではありません。

1 DB2 Administration Server (DAS)

1 AIX® 5L、HP-UX、および Solaris™ オペレーティング環境でツール・カタログ・デー
1 タベースが 64 ビット・インスタンスで作成される場合、DAS 移行 (dasmigr) および
1 バックレベルのスクリプト・センターとジャーナルはサポートされません。

DB2 Workgroup Server Edition 用 DB2 ライセンス・ポリシー

「DB2 サーバーの概説およびインストール」ブックおよびライセンス・センターのオンライン・ツール・ヘルプでは別の記述がありますが、インターネット・ライセンス・ポリシーは DB2 Universal Database Workgroup Server Edition では使用できません。インターネット・ユーザーのライセンスが必要な場合は、DB2 Universal Database Unlimited Workgroup Server Edition を購入する必要があります。

DB2 Web ツール

以下の言語では、DB2 Web ツールでサポートされるアプリケーション・サーバーは、サブレット 2.3 仕様に準拠している必要があります。

- 日本語
- 韓国語
- 中国語 (簡体字)
- 中国語 (繁体字)
- ロシア語
- ポーランド語

DB2 Warehouse Manager は中国語 (簡体字) では使用しない

DB2 Warehouse Manager は中国語 (簡体字) では使用できません。そのため、次の従属 DB2 コンポーネントもこの環境では使用できません。

- インフォメーション・カタログ・センター (DB2 Warehouse Manager のインフォメーション・カタログの管理ウィザードに従属)。
- DB2 Warehouse Manager Connector for the Web および DB2 Warehouse Manager Connector for SAP (DB2 Warehouse Manager のインストールに従属)。

DB2 UDB Version 6 for OS/390 および DB2 UDB Version 7 for z/OS での SQLJ および SQL アシスタントのサポートに必要なデベロップメント・センターの APAR

Windows または UNIX® オペレーティング・システム上の DB2 バージョン 8 用の Application Development Client でデベロップメント・センターを使用するときは、SQLJ および SQL アシスタントのサポートを有効化するために以下の APAR をインストールする必要があります。

z/OS™ 上の DB2 UDB バージョン 7

- PQ65125 - JAVA SQLJ ストアード・プロシージャの作成用の SQLJ サポートを提供します。
- PQ62695 - SQL アシスタントのサポートを提供します。

OS/390® 上の DB2 UDB バージョン 6

- PQ62695 - SQL アシスタントのサポートを提供します。

64 ビット・オペレーティング・システムでのデベロップメント・センターの制約事項

64 ビット・サーバーに対する JAVA ストアード・プロシージャのデバッグは、デベロップメント・センターではサポートされていません。SQL ストアード・プロシージャのデバッグは、64 ビットの Windows オペレーティング・システムにおいてサポートされています。OLE DB と XML は、64 ビット・サーバーではサポートされていません。

Intel 32 ビット Linux オペレーティング・システム上のデベロップメント・センター

Intel 32 ビット Linux オペレーティング・システムで実行中の Java™ ストアード・プロシージャをデバッグするためにデベロップメント・センターを使用することはできません。

デベロップメント・センターの Windows 98 オペレーティング・システムのサポート

デベロップメント・センターは Windows 98 オペレーティング・システムでサポートされます。

デベロップメント・センターが OS/390 または z/OS サーバー上で実行される SQL ステートメントの実コスト情報をサポート

DB2 バージョン 6 およびバージョン 7 の OS/390 および z/OS サーバー上で実行される SQL ステートメントの実コスト情報を、DB2 デベロップメント・センターから得られるようになりました。以下の実コスト情報が提供されます。

- 1 • CPU 時間
 - 1 • CPU 時間 (外部形式)
 - 1 • CPU 時間 (100 分の 1 秒単位の整数)
 - 1 • ラッチ/ロック競合待ち時間 (外部形式)
 - 1 • 取得ページ数 (整数形式)
 - 1 • 読み取り I/O 数 (整数形式)
 - 1 • 書き込み I/O 数 (整数形式)
- 1 この機能を使用すると、さまざまなホスト変数値を指定された単一 SQL ステートメント
1 の実コスト結果の複数セットを表示することもできます。
- 1 実コスト情報は、デベロップメント・センターの、「SQL ストアド・プロシージャー
1 の作成 (Create SQL Stored Procedure)」および「Java ストアド・プロシージャーの作
1 成 (Create Java Stored Procedure)」ウィザードでの OS/390 および z/OS 接続用の SQL
1 ステートメント・ウィンドウから得ることができます。実コスト機能を使用するには、
1 いずれかのストアド・プロシージャー・ウィザードで、「OS/390 および z/OS 接続
1 (OS/390 and z/OS connection)」ウィンドウにある「**実コスト(Actual Cost)**」ボタンをク
1 リックします。実コスト機能を使用するには、DB2 OS/390 サーバーにストアド・プ
1 ロシージャー・モニター・プログラム (DSNWSPM) をインストールしておく必要があ
1 ります。

連合システムの制約事項

DB2 バージョン 7.2 (for UNIX® and Windows) 連合データベースのユーザーについて:

DB2 バージョン 8 (for UNIX and Windows) の表およびビューのニックネームを正常に作成するには、DB2 バージョン 7.2 (UNIX および Windows 版) フィックスパック 8 をバージョン 7.2 (UNIX および Windows 版) 連合データベースに適用する必要があります。ご使用の DB2 for UNIX および Windows バージョン 7.2 の連合データベースにフィックスパック 8 を適用しない場合にニックネームにアクセスするとエラーが発生します。

LONG VARCHAR および LONG VARGRAPHIC サポート:

連合システムのドキュメンテーションには、DB2 ファミリー製品で使用される LONG VARCHAR および LONG VARGRAPHIC データ・タイプはサポートされないと指摘されています。これは完全に正確だというわけではありません。LONG VARCHAR および LONG VARGRAPHIC データ・タイプ列の入った DB2 (UNIX および Windows 版) のデータ・ソース・オブジェクトにはニックネームを作成することができます。これらのリモート列は DB2 (UNIX および Windows 版) の LOB データ・タイプにマップさ

れます。 DB2 ファミリーの他の製品については、これらのデータ・タイプを省略または作成しなおすビューを作成してから、このビューに対するニックネームを作成することができます。

WITH HOLD カーソル:

1 ニックネームまたは PASSTHRU セッションで定義されたカーソルで WITH HOLD セ
1 マンティクスを使用することができます。ただし、このセマンティクスを (COMMIT 指
1 定で) 使用しようとした場合に、データ・ソースが WITH HOLD セマンティクスをサ
1 ポートしていないと、エラーを受け取ることになります。

サポートされないデータ・ソース:

以下のデータ・ソースは、バージョン 8.1 ではサポートされていません。

- Microsoft SQL Server
- ODBC
- Oracle®
- Sybase
- BLAST
- Documentum
- Microsoft Excel
- 表構造ファイル
- XML タグ・ファイル

これらのデータ・ソースは連合システムのドキュメンテーションに記述されていますが、今回はサポートされていません。

DB2 Server for VM and VSE のサポート:

DB2 Server for VM and VSE の連合サポートが、このフィックスパックに追加されました。

サポートされない製品:

以下の製品は、バージョン 8.1 ではサポートされていません。

- DB2 Relational Connect
- DB2 Life Sciences Data Connect

1 これらの製品は連合システムのドキュメンテーションに記述されていますが、今回はサ
ポートされていません。

サポートされないオペレーティング・システム:

連合システムは Windows ME オペレーティング・システムではサポートされていません。

データ・ソースにアクセスする連合サーバーのセットアップ:

コンパクト・インストール・オプションでは、DB2 ファミリーまたは Informix™ データ・ソースへの必要なアクセスはインストールされません。DB2 ファミリー・データ・ソースにアクセスするには、標準またはカスタム・インストールを使用する必要があります。カスタム・インストールのみで、DB2 ファミリーと Informix データ・ソースの両方へのアクセスをインストールできます。

連合システム・データベース・ディレクトリーでの DB2 ファミリー・データ・ソースのカatalog作成:

リモート・データベースの名前が 9 文字以上の場合、データベース接続サービス (DCS) ディレクトリー・エントリーを作成する必要があります。

CATALOG DCS DATABASE コマンドを使用して DCS ディレクトリー内のエントリーをデータベースにCatalog作成する例は、以下のとおりです。

```
CATALOG DCS DATABASE SALES400 AS SALES_DB2DB400
```

詳細は次のとおりです。

```
SALES400
```

CATALOG DATABASE コマンドで入力したリモート・データベースの名前です。

```
AS SALES_DB2DB400
```

Catalog作成したいターゲット・ホスト・データベースの名前です。

DB2 Universal Database Workgroup Server Edition に組み込まれた高可用性機能

『DB2 Workgroup Server Edition』の項には明記されていませんが、『DB2 Enterprise Server Edition』の項に述べられている DB2 Universal Database Enterprise Server Edition の高可用性機能は、DB2 Universal Database Workgroup Server Edition に組み込まれています。

2 Microsoft Visual Studio .NET 用の DB2 Development Add-In

2 Microsoft Visual Studio .NET 用の IBM DB2 Development Add-In は、DB2 Universal
2 Database for z/OS and OS/390 バージョン 8 をサポートしません。

2 Linux でのインストール

2 バージョン 8.1 の DB2 を Linux にインストールすると、RPM ベースのインストー
2 ルでは IBM Java RPM (IBMJava2-SDK-1.3.1.-2.0.i386.rpm) のインストールが試みられま

2 す。より高いレベルの RPM (IBMJava2-SDK-1.4.0.-2.0.i386.rpm など) がすでに存在する
2 と、バックレベルの RPM はインストールされません。

2 ただしそのような場合でも、Java 1.3 パスの /opt/IBMJava2-14/ を指す JDK_PATH デ
2 ータベース構成パラメーターはそのままになります。というわけで、DB2 ツール・カタ
2 ログのインストールなどの、Java に依存する機能はいずれも作動しなくなります。

2 この問題を解決するには、インスタンス所有者として次のようなコマンドを実行しま
2 す。

2 db2 update dbm cfg using JDK_PATH /opt/IBMJava2-14

2 これで、DB2 では正しい JDK が指されるようになります。

ライセンス・センターのバックレベル・バージョンの非サポート

バージョン 7 のライセンス・センターが、バージョン 8 サーバーに接続しようとする
と、ライセンス・センターは「SQL1650 - 機能はサポートされていません」というエラ
ー・メッセージを受け取ります。これは接続がサポートされていないことを示します。

Microsoft Visual Studio、Visual C++

1 DB2 デベロップメント・センターのオンライン・ヘルプには Build not successful:
1 -1 エラーの場合の可能な解決策が記載されていますが、Microsoft Visual Studio Visual
1 C++ バージョン 5.0 は、SQL ストアード・プロシージャの開発用にはサポートされ
1 ています。ただし、Microsoft Visual Studio Visual C++ バージョン 6.0 はサポートさ
1 れています。追加構成情報は、「IBM DB2 UDB アプリケーション開発ガイド: アプリ
1 ケーションの構築および実行」に記載されています。追加構成情報は、『アプリケー
1 ション開発環境のセットアップ』の項に記載されています。

64 ビット・オペレーティング・システムに必要な Microsoft XP のフィクス

Microsoft XP オペレーティング・システム (2600) を使用していて、DB2 ファミリー
製品で NETBIOS プロトコルを使用するように構成されている場合、Microsoft からホ
ット・フィクスを入手する必要があります。Knowledge Base アーティクル番号
Q317437 について、Microsoft に問い合わせてください。

MVS オペレーティング・システムの非サポート

ドキュメンテーションには書かれていますが、MVS™ オペレーティング・システムはも
はや DB2 Universal Database ではサポートされていません。

Solaris オペレーティング環境および Windows Server 2003 上でのDB2 XML エクステンダーのサポート

XML エクステンダーとの共用をサポートされている Solaris オペレーティング環境のバージョンはバージョン 7、バージョン 8、およびバージョン 9 です。XML エクステンダーはまた、Windows Server 2003 (32 ビット) でもサポートされています。

Windows XP オペレーティング・システム

- 2 Windows XP Professional オペレーティング・システムは、Personal Edition 製品と
2 Workgroup Server Edition 製品でのみサポートされています。Windows XP Home
2 Edition オペレーティング・システムは、Personal Edition 製品でのみサポートされてい
2 ます。

アプリケーション開発

CLI の非同期実行

CLI の非同期実行は使用できません。

Windows 64 ビット・オペレーティング・システム上の CLI および ODBC

- 2 ODBC と DB2 CLI の混在したアプリケーションを Windows 64 ビット・オペレーテ
2 ング・システムで使用することはできません。
2

構成アシスタント

サポートされないバインド・オプション

構成アシスタントは、以下のバインド・オプションをサポートしません。

- CALL RESOLUTION
- CLIPKG
- CNULREQD
- DBPROTOCOL
- ENCODING
- MESSAGES
- OPTHINT
- OS400NAMING
- GENERIC
- IMMEDIATE
- KEEP DYNAMIC
- PATH

- SORTSEQ
- TRANSFORM_GROUP
- VALIDATE
- VARS

構成パラメーター

複数パーティションのデータベース上の NUM_LOG_SPAN 構成パラメーター

NUM_LOG_SPAN は、トランザクションの対象となりうるログ・ファイルの最大数を指定します。どのような場合でも、NUM_LOG_SPAN 設定に違反したトランザクションはロールバックされて、そのようなトランザクションの原因となったアプリケーションをデータベースから強制的に排除します。

ただし複数パーティション・システムにおいては、db2loggr プロセスがアプリケーションを強制排除できるのは、アプリケーションの調整ノードと、エラーを検出する db2loggr プロセスのノードが同じ場合のみです。たとえば、3 つのノード (0、1、および 2) をもつシステムの場合に、すべてのノードで NUM_LOG_SPAN パラメーターを 2 に設定したとします。この場合、アプリケーションはデータベースのノード 2 に接続してから、長時間実行トランザクションを開始しますが、その対象は複数のログ・ファイルになります。ノード 1 上の db2loggr プロセスがそのエラーを最初に検出しても、何も起きません。しかし同じ違反がノード 2 でも起きると、db2loggr プロセスによってそのエラーが検出されて、トランザクションはロールバックされてアプリケーションは強制的に排除されます。

DB2 バックアップおよびリストア

Linux 390 オペレーティング・システム上のバックアップおよびリストア

Linux 390 オペレーティング・システムの使用時には、複数の磁気テープ装置とのやりとりを行うバックアップおよびリストア操作は順調に働かない可能性があります。

DB2 Data Links Manager

Data Links サーバーのバックアップは、Tivoli Storage Manager アーカイブ・サーバー (AIX、Solaris オペレーティング環境) を使用しない

問題: DB2 Data Links Manager バージョン 8 のインストールまたはこのバージョンへの移行中にデータ・リンク・ファイル・マネージャー (DLFM) で開始された Tivoli® Storage Manager アーカイブ・サーバーへのデータ・リンク・サーバー・データのバックアップができない。以下のエラー・メッセージのいずれかが画面に表示されるか、インストール状況のレポートに書き出されます。

DLFM129I: Automatic backup of DLFM_DB database has been triggered.
Please wait for the backup to complete.

DLFM901E: A system error occurred. Return code = "-2062".
The current command cannot be processed.
Refer to the db2diag.log file for additional information.

— または —

DLFM811E: The current DLFM database could not be backed up.
SQL code = "-2062", Return code = "-2062"

DLFM901E: A system error occurred. Return code = "-2062".
The current command cannot be processed.
Refer to the db2diag.log file for additional information.

原因: DB2 Data Links Manager インストーラー・プログラムが Tivoli Storage Manager を、データ・リンクのサーバー・マシンに対するアーカイブ (バックアップ) サーバーとして使用するために必要な変数を設定できませんでした。

ヒント: Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する予定の場合に、DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 のインストールまたはこのバージョンへの移行がまだ完了していなければ、この問題が発生しないようにすることができます。まず、インストーラー・プログラムでは "Tivoli Storage Manager" バックアップ・オプションを使用しないでください。次に、下記のステップ 2 に記述しているように、該当する Tivoli Storage Manager の変数を組み込むように Tivoli Storage Manager の管理者プロファイルを手動で構成してください。このタスクを両方とも完了したら、インストールあるいは移行を続行することができます。

対処策: 次のタスクをリストの順に実行します。

1. 次のコマンドで DLFM データベースをバックアップします。 db2 backup
<dlfm_db><path>
 - <dlfm_db> は DLFM データベースの名前です。デフォルトでは、データベースは DLFM_DB という名前です。
 - <path> は選択項目のバックアップ・ストレージ・ロケーションへのディレクトリ・パスです。
2. 該当する Tivoli Storage Manager の変数を組み込むように Tivoli Storage Manager の管理者プロファイルを手動で構成してください。手動構成の手順および必要な変数は、次のドキュメンテーションのトピックに記述があります。
 - Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する (AIX)
 - Tivoli Storage Manager をアーカイブ・サーバーとして使用する (Solaris オペレーティング環境)

これらのトピックについては、オンラインの DB2 インフォメーション・センターまたは「DB2 Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」の『システム管理オプション』の章で確認することができます。

- DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 の新規インストールを完了している場合は、ここで終わりです。
- DB2 Data Links Manager バージョン 8.1 への移行の場合は、移行ユーティリティ・プログラム **db2dlmmg** を再実行してください。

1 DataJoiner またはレプリケーションの使用時の DB2 の移行

1 DB2 レプリケーション用のキャプチャーまたはアプライ・プログラムを実行している
1 DataJoiner® または DB2 (UNIX および Windows 版) のインスタンスを移行する場
1 合は、DB2 または DataJoiner インスタンスを移行する前に、レプリケーション環境の移
1 行の準備を行う必要があります。必要な準備を行うための詳細な方法は、DB2
1 DataPropagator™ バージョン 8 用の移行に関するドキュメンテーションに記載されてい
1 ます。DB2 DataPropagator バージョン 8 用の移行に関するドキュメンテーションは、
1 <http://www.ibm.com/software/data/dpropr/library.html> にあります。

DB2 レプリケーション

DB2 データ・レプリケーション用の Java 管理 API ドキュメンテーション

DB2 DataPropagator で使用可能な管理機能を使用して、アプリケーション開発をしている場合、IBM サポートから、関係のある管理 Java API のドキュメンテーションを入手できます。

列マッピングの制約事項およびレプリケーション・センター

ターゲット表で IBMSNAP_SUBS_MEMBR 表の TARGET_KEY_CHG 列が「Y」に設定されている場合に、ソース表内の式をターゲット表内のキー列にマップすることはできません。その意味するところは、サブスクリプション・セット・メンバーの作成でのレプリケーション・センターの使用時に、ターゲット表のキー列がソース表の式にマップされる場合には、オプション「ターゲット・キー列を更新するために、アプライ・プログラムに変更前イメージ値を使用させる」を選択してはならないということです。

iSeries システムでのレプリケーション・センターの制約事項

IASP における管理用タスク:

レプリケーション・センターの使用中に、iSeries™ システムでは IASP で管理用タスクは実行できません。

iSeries コントロール、ソース、およびターゲット・サーバーを使用するレプリケーション・ステップでの制約事項:

iSeries コントロール、ソース、およびターゲット・サーバーは、DB2 Universal Database Enterprise Server Edition でのみサポートされます。

Clean Data トランスフォーマーの制約事項

リンクの制約事項:

表またはビューなどの OS/390 データ・リソースを、新規の Clean Data ステップにリンクすることはできません。OS/390 データ・リソースを、使用すべきでないプログラム Clean Data ステップにリンクすることはできます。

パラメーターの制約事項:

「検索および置換」パラメーター: 新規の Clean Data トランスフォーマー規則表に検索および置換列の異なるデータ・タイプが入っている場合、トランスフォーマーをテスト・モードにプロモートする前に、ターゲット表データ・タイプをターゲット表プロパティ・ページおよび列マッピング・ページの両方で変更する必要があります。

「Discretize」パラメーター: 新規の Clean Data トランスフォーマー規則表にバインド済みおよび置換列の異なるデータ・タイプが入っている場合、トランスフォーマーをテスト・モードにプロモートする前に、ターゲット列データ・タイプをターゲット表プロパティ・ページおよび列マッピング・ページの両方で変更する必要があります。

iSeries プラットフォームの制約事項:

iSeries プラットフォームでは、新規の Clean Data トランスフォーマーはエラー処理を行いません。「すべて合致」合致タイプは、iSeries プラットフォーム上でのみ生成できます。

レプリケーション用のウェアハウス・エージェントの使用および Client Connect ウェアハウス・ソースへのアクセス

レプリケーションでのウェアハウス・エージェントの使用

ソース、ターゲット、キャプチャー・コントロール、またはアプライ・コントロール・サーバー (データベース) がクライアント・システムに対してリモートである場合、クライアントおよびウェアハウス・エージェント・システムのどちらでも、同じ名前、ユーザー ID、およびパスワードでデータベースをカタログする必要があります。クライアントとウェアハウス・エージェントの両方のシステムでソースをカタログした後で、ソース、ターゲット、キャプチャー、およびアプライ・データベースに接続できることを確認してください。

ウェアハウス・ソース、ウェアハウス・ターゲット、レプリケーション・キャプチャー、またはレプリケーション・アプライ・データベースに接続できない場合は、リモート・システムの環境変数 DB2COMM が TCP/IP に設定されていて、しかもポート番号は、クライアント・システムでカタログされたノードのポート番号と一致することを確認してください。

リモート・システムのポート番号を確認するには、以下のコマンドを DB2 コマンド・プロンプトで入力します。

```
get dbm cfg | grep SVCENAME
```

ノードをカタログするときに、クライアント・システムのポート番号を指定します。

ウェアハウス・エージェントを使用した Client Connect ウェアハウス・ソースへのアクセス

Client Connect を使用して、ウェアハウス・エージェントで定義されたウェアハウス・ソースにアクセスする場合、ソースはクライアント・システムおよびウェアハウス・エージェント・システムの両方で、同じ名前、ユーザー ID、およびパスワードでカタログ作成される必要があります。ODBC バージョンのウェアハウス・エージェントを使用している場合は、ウェアハウス・エージェント・サイトおよびクライアント・サイトの両方で、ソースを ODBC ソースとしてカタログ作成する必要があります。そうしないと、ウェアハウス・エージェントからのウェアハウス・ソースへのアクセスを必要とするアクションは失敗します。

インターバルを設けられたウェアハウス・プロセスの実行のスケジューリング

ウェアハウス・プロセスを時間間隔で実行するようスケジュールすると、プロセスのすべての実動ステップを実行するために必要な最長の時間を判別し、その間隔を適宜にスケジュールする必要があります。スケジュールされた時間間隔をプロセスが超過した場合は、後続のスケジュール済みのプロセスはすべて実行されず、また再スケジュールされることもありません。

ドキュメンテーション

DB2 レプリケーションのガイドおよびリファレンス・ドキュメンテーション

「レプリケーションのガイドおよびリファレンス」のまえがきに参照されている

<http://www.ibm.com/software/data/dbtools/datarepl.htm> のソリューション情報はもう存在しません。

DB2 バージョン 8 HTML ドキュメンテーション・インストールの制約事項 (Windows)

Windows では、DB2 バージョン 7 (またはそれ以前のバージョン) がすでにインストールされているワークステーションまたはサーバーには、DB2 バージョン 8 HTML ドキュメンテーションをインストールしないでください。インストーラーが以前のバージョンを検出し、以前の製品を除去します。

対処法が存在します。古いバージョンの DB2 がインストールされているマシンに、DB2 バージョン 8 HTML ドキュメンテーションをインストールする必要がある場合

は、インストーラーを使用しないで、DB2 バージョン 8 HTML ドキュメンテーション CD から、手動でファイルおよびディレクトリーをコピーできます。DB2 インフォメーション・センターおよび全テキスト検索が使用できますが、HTML ドキュメンテーション・フィックスパックを適用することはできません。

AIX ではドキュメンテーションの全カテゴリーをインストールしていないとドキュメンテーション検索が失敗することがある

DB2 HTML ドキュメンテーション CD-ROM に含まれているすべてのカテゴリーのドキュメンテーションをインストールしないと、「すべてのトピック (All topics)」での検索を行うと失敗し、ブラウザの Java コンソールに `InvalidParameterException` がレポートされて検索結果が表示されない場合があります。

この問題に対処するには、以下のいずれかを行ってください。

- 「検索 (Search)」ウィンドウの「検索範囲 (Search scope)」リスト・ボックスで選択して、検索の範囲を狭くする。
- DB2 HTML ドキュメンテーションの CD-ROM からすべてのドキュメンテーション・カテゴリーをインストールする。

Java 2 JRE1.4.0 でのドキュメンテーション検索の問題

ブラウザが Java 2 JRE v1.4.0 を使用している場合に、スペースの入ったパス (例 `C:\Program Files\SQLLIB\doc\`) にドキュメンテーションがインストールされていると、ドキュメンテーション検索アプレットが失敗し、ブラウザの Java コンソールに `InvalidParameterException` がレポートされて検索結果が表示されない場合があります。この問題は、JRE v1.4.1 では修正されています。

この問題に対処するには、以下のいずれかを行ってください。

- ブラウザーの JRE のバージョンを 1.4.1 (<http://java.sun.com/j2se/1.4.1/download.html> から入手可能) にアップグレードする。
- ブラウザーの JRE のバージョンを 1.3.x (<http://www-3.ibm.com/software/data/db2/udb/ad/v8/java/> から入手可能) にダウングレードする。

インストール時のオプションにない言語での DB2 インフォメーション・センターのインストール

DB2 のセットアップ・ウィザードでは、DB2 製品のインストール用でもある言語の DB2 HTML ドキュメンテーションだけをインストールすることができます。よって、以下の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを使って DB2 HTML ドキュメンテーションをインストールすることはできません。

- ヘブライ語
- ギリシャ語 (UNIX の場合のみの制約事項)

- ポルトガル語 (UNIX の場合のみの制約事項)

そのような言語でインフォメーション・センターをインストールするには、次のようにします。

1. *DB2 HTML* ドキュメンテーション CD を CD-ROM ドライブに挿入します。
2. 以下のディレクトリーをご使用のコンピューターにコピーします。

- Windows オペレーティング・システムの場合

`d:¥lang¥`

`d:` は CD-ROM ドライブ、`lang` は使用したい言語のコードです。

- UNIX オペレーティング・システムの場合

`/cdrom/language/`

`cdrom` は CD をマウントしている場所、`language` は使用したい言語のコードです。

フォルダーはどこに置いてもかまいません。*DB2 HTML* ドキュメンテーションは、CD から直接表示することもできます。この方法については、概説およびインストールの『*DB2 HTML* ドキュメンテーション CD から直接技術情報を表示』トピックを参照してください。

注:

1. ドキュメンテーションを表示するには、Microsoft Internet Explorer 5.0 以上、または Netscape 6.1 以上のブラウザを使用する必要があります。
2. 同様に、ドキュメンテーションを製品から立ち上げると、手でコピーしたドキュメンテーションではなく、製品のインストールの一部としてインストールされたドキュメンテーションになります。

1 **ホスト・システムでの使用時の DB2 for Linux の正式名称**

1 ホスト・システムでの DB2 for Linux の正式名称は、*DB2 on Linux for S/390® and*
1 *zSeries™* です。S/390 は 32 ビットであることを示し、zSeries は 64 ビットであることを示します。また、次の用語も廃止されていますので注意してください。

1 • 64 ビット Linux/390

1 • Linux/SGI

GUI ツール

コントロール・センターのプラグインのサポート

現在、コントロール・センターはカスタム・フォルダーをサポートしています。カスタム・フォルダーには、ユーザー選択のシステムまたはデータベース・オブジェクトを入れることができます。カスタムの Ffolder 専用のコントロール・センター・プラグイン

を作成することはできませんが、カスタム・フォルダーに収容されるオブジェクトのプラグインを作成することはできます。コントロール・センターのプラグインの詳細は、コントロール・センター用のプラグイン・アーキテクチャーの紹介を参照してください。

DB2 GUI ツールでのインド語文字の表示

DB2 GUI ツールの使用中に、インド語文字の表示で問題がある場合は、必要なフォントがシステムにインストールされていない可能性があります。

DB2 Universal Database には、以下の IBM TrueType および OpenType プロポーショナル・インド語言語フォントがパッケージされています。これらは、*IBM Developer Kit, Java Technology Edition, Version 1.3.1 for AIX operating systems on 64-bit systems CD* の fonts ディレクトリーにあります。これらのフォントは、DB2 と共にのみ使用されます。これらのフォントの一般または無制限の販売、または配布を行うことはできません。

表 1. DB2 Universal Database にパッケージされたインド語のフォント

書体	重み	フォント・ファイル名
Devanagari MT for IBM	中	devamt.ttf
Devanagari MT for IBM	Bold	devamtb.ttf
Tamil	中	TamilMT.ttf
Tamil	Bold	TamilMTB.ttf
Telugu	中	TeluguMT.ttf
Telugu	Bold	TeleguMTB.ttf

フォントのインストールおよび font.properties ファイルの変更方法についての詳細については、IBM development kit for Java のドキュメンテーションの国際化対応セクションを参照してください。

さらに、以下の Microsoft 製品には、GUI ツールで使用できるインド語フォントが付属しています。

- Microsoft Windows 2000 オペレーティング・システム
- Microsoft Windows XP オペレーティング・システム
- Microsoft Publisher
- Microsoft Office

Linux オペレーティング・システムが稼働する zSeries サーバーでの GUI ツールの非サポート

DB2 セットアップ・ウィザードを除いて、Linux オペレーティング・システムが稼働中の zSeries サーバーでは、GUI ツールは使用できません。クイック・ツアーなどの、インストール・ランチパッドから通常起動されるすべての項目がこの制限の対象になります。

これらのシステムで GUI ツールを使用したい場合は、クライアント・システムに別のシステム構成で管理ツールをインストールし、このクライアントを使用して zSeries サーバーに接続してください。

列のロードおよびインポート・ページでの IXF ファイル内の DBCS 文字の非サポート

ロード・ウィザードまたはインポート・ノートブックを使用して、DBCS 文字の入った IXF 入力ファイルからのロードまたはインポートを設定すると、列ページは、ファイル内の列名を正しく表示しません。

ロード操作の失敗時の誤ったインディケータの表示

ロードが失敗した場合に、警告しか (エラーではない) 返されないと、タスク・センターのタスク・アイコンに緑のチェックマークが表示されます。実行したいずれのロードが成功したかを慎重に確かめてください。

GUI ツールの最小限の表示設定

コントロール・センターなどの GUI ツールが正常に動作するには、最低 800 x 600 dpi の画面解像度、および最低 32 色の表示パレットを使用する必要があります。

AIX での GUI ツール使用時の SQL1224N エラー

AIX オペレーティング・システム上で GUI ツールを使用すると、SQL1224N エラーが表示される場合があります。このエラーの原因は、DB2 内のメモリー処理上の問題にあります。以下の対策で、エラーを解決できます。

手順:

AIX オペレーティング・システムで SQL1224N エラーを止めるには、以下のようになります。

1. インスタンス所有者として、以下のコマンドを実行します。

```
export EXTSHM=ON
db2set DB2ENVLIST=EXTSHM
```

2. 以下のコマンドでインスタンスを再始動します。

```
db2stop
db2start
```

インスタンスが、新規の環境変数設定で再始動されると、SQL1224N エラーは止まります。

ヘルス・モニター

デフォルトでのヘルス・モニターのオフ

ヘルス・モニター (HEALTH_MON) のデータベース・マネージャー・スイッチのデフォルト値は OFF です。

ヘルス・インディケーターの制約事項

2 db2.db2_op_status ヘルス・インディケーターが停止状態に入ると、ヘルス・モニターは
2 このインディケーターに対するアクションを実行できません。この状態の原因になりう
2 るのは、たとえば、明示的な停止要求または異常終了に起因して、インディケーターが
2 モニターしているインスタンスが非アクティブになった場合です。異常終了の後は常に
2 インスタンスが自動的に再始動するようにしたければ、インスタンスが「高可用」に保
2 たれるように障害モニターを構成する必要があります。

複数フィックスパック環境での dasdrop の制約事項

代替フィックスパックでは、それぞれのバージョンの **dasdrop** コマンドがインストールされます。このコマンドは、AIX では /usr/opt/db2_08_FPn/ パスにインストールされます。他の UNIX システムでは、このコマンドは /opt/IBM/db2/V8.FPn/ パスにインストールされます。どちらの場合も、*n* はフィックスパックの番号です。

複数フィックスパックの環境でセットアップできる DAS は常に 1 つだけです。バージョン 8.1 の製品に対して、または任意の代替フィックスパックに対して、DAS を作成することができます。バージョン 8.1 の製品に対して作成された DAS をドロップする場合は、任意のバージョンの **dasdrop** を使用して DAS をドロップすることができます。しかし、代替フィックスパックに対して作成された DAS をドロップする場合は、代替フィックスパックのバージョンの **dasdrop** を使用する必要があります。

たとえば、AIX オペレーティング・システム上での次のシナリオを考えてみます。

- DB2 バージョン 8.1 をインストールする。
- 代替フィックスパック 1 をインストールする。
- バージョン 8.1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成する。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dascrt dasusr1
```

- DAS をドロップしたい。

この DAS は、次のいずれのコマンドを使用してもドロップすることができます。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dasdrop
```

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

いずれも正しく機能します。

しかし、次の例ではどうでしょう。

- DB2 バージョン 8.1 をインストールする。
- 代替フィックスパック 1 をインストールする。
- 代替フィックスパック 1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成する。
`/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dascrt dasusr1`
- このドロップ DAS をドロップしたい。

この場合は次のように、代替フィックスパック 1 の **dasdrop** コマンドを使用する必要があります。

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

バージョン 8.1 の **dasdrop** コマンドを使用すると、エラーになります。

この制限が適用されるのはバージョン 8.1 の製品に対してのみであり、通常フィックスパックには適用されません。たとえば、次のようにします。

- DB2 バージョン 8.1 をインストールする。
- 通常フィックスパック 1 を適用する。これによりバージョン 8.1 の **dasdrop** に関連する問題が訂正されます。
- 代替フィックスパック 1 をインストールする。
- 代替フィックスパック 1 のコードを使用し、次のコマンドで DAS を作成する。
`/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dascrt dasusr1`
- このドロップ DAS をドロップしたい。

この DAS は、次のいずれのコマンドを使用してもドロップすることができます。

```
/usr/opt/db2_08_01/instance/dasdrop
```

```
/usr/opt/db2_08_FP1/instance/dasdrop
```

`/usr/opt/db2_08_01/` パス内のバージョンの **dasdrop** は通常フィックスパックを適用した時点で訂正されているため、これらはいずれも正しく機能します。

インフォメーション・カタログ・センターの表

2 インフォメーション・カタログ表は区分化しない

2 インフォメーション・カタログ・マネージャーが使用する表は、1 つのデータベース・
2 パーティション内に収まっていなければなりません。1 つのパーティション内に表を入
2 れるのに利用できる方法は多数あります。以下の手順は、そのような目的のためのアプ
2 ローチの 1 つです。

1. DB2 コマンド行プロセッサを開いて、以下のコマンドを発行します。

- a. CREATE DATABASE PARTITION GROUP *pgname* ON DBPARTITIONNUM *pnumber*
- b. CREATE REGULAR TABLESPACE *tsname* IN DATABASE PARTITION GROUP *pgname*
MANAGED BY SYSTEM USING ('*cname*')

「スタート」 --> 「プログラム」 --> 「IBM DB2」 --> 「セットアップ・ツール (Set-up Tools)」 --> 「インフォメーション・カタログの管理ウィザード (Manage Information Catalog Wizard)」をクリックします。

「オプション (Options)」 ページで、表スペース名を「**表スペース (Table space)**」に指定します。

1 Windows の保護環境

Windows システムでの管理者でないユーザーが Windows 上で DB2 を使用すると、ファイル許可の問題が起こる場合があります。SQL1035N、SQL1652N、または SQL5005C のエラー・メッセージが表示された場合、考えられる原因と対策は以下のとおりです。

ユーザーは、**sqllib** ディレクトリーに対する十分な権限を持っていない:

問題 DB2 CLP またはコマンド・ウィンドウを開こうとすると、SQL1035N または SQL1652N エラーになる。DB2 コード (コア・ファイル) は書き込み特権が限定されるディレクトリー構造にインストールされますが、いくつかの DB2 ツールでは DB2INSTPROF ディレクトリーでファイルの書き込みと作成を行う必要があります。

対処法 ユーザーに少なくとも MODIFY 許可を付与できる新規ディレクトリーを作成し、**db2set -g db2tempdir** を使用して新規ディレクトリーを指すようにするか、または Windows システム環境の db2tempdir 変数を設定します。

ユーザーが **SYSADM_GROUP** に属していても **sqllib¥<instance_dir>** ディレクトリーへ書き込むための十分な権限がない:

問題 データベース・マネージャー構成ファイルを更新しようとする (update dbm cfg)、SQL5005C システム・エラーになる。ユーザーを **SYSADM_GROUP** に追加しても、そのユーザーには **sqllib¥instance_dir** ディレクトリーに書き込むために必要な NTFS アクセス権はありません。

最初の対策

ユーザーにファイル・システム・レベルで **instance_dir** ディレクトリーの少なくとも MODIFY 許可を付与します。

2 番目の対策

ユーザーに少なくとも MODIFY 許可を付与できる新規ディレクトリーを作成します。**db2set db2instprof** を使用して、新しいディレクトリーを指定します。db2instprof で指定した新規インスタンス・ディレクトリーの下に情報が

- 1 保管されるようにインスタンスを再作成するか、または古いインスタンス・ディレクトリーを新規ディレクトリーに移動する必要があります。

SQL アシスタント

コマンド・センターでの SQL アシスタント・ボタンの使用禁止

コマンド・センターでは、接続が確立した時にのみ SQL アシスタント・ボタンが使用可能になります。

DB2 から起動される 2 つのバージョンの SQL アシスタント

DB2 バージョン 8.1 では、バージョン 7 とバージョン 8 の両方の SQL アシスタントを呼び出すことができます。バージョン 7 は DB2 データウェアハウス・センターから起動できます。その他のすべてのセンターは、最新のバージョン 8 を起動します。製品のオンライン・ヘルプには、SQL アシスタント・バージョン 7 についての追加情報があります。

2 スロットル・ユーティリティーの制約事項

- 2 複数のスロットル・ユーティリティーの同時実行はサポートされていません。以下に例を示します。
- 2 • 3 件のオンライン・バックアップを実行する場合、1 件のみをスロットルすることができます。残りの 2 件には、優先順位 0 を付ける必要があります。
 - 2 • 再バランスとバックアップを同時に呼び出すことができますが、再バランスまたはバックアップのいずれかに優先順位 0 を設定しておかなければなりません。
- 2 複数のスロットル・ユーティリティーを同時に呼び出すと、ユーティリティーが異常に長時間実行される原因になることがあります。また、影響ポリシー (UTIL_IMPACT_LIM) で設定された限度よりも重大な影響をシステムに与える原因になることもあります。

XML エクステンダー

XML エクステンダー・サンプル・プログラムの名前変更

- 2 システム操作と XML エクステンダーが競合すると、一部の XML エクステンダー・サンプル・プログラムが原因でご自分のファイルがはなはだしい損傷を被ることがあります。競合を生じる XML エクステンダーのサンプル・プログラムと、それに代わる、競合の原因になりにくい新規のプログラムを以下に一覧で示してあります。必ず、旧プログラムではなく新規のサンプル・プログラムを使用してください。

XML エクステンダーの置換用サンプル・プログラム (Windows)

旧プログラム (使用しないでください)	新プログラム (これを使用してください)
insertx.exe	dxxisrt.exe
retrieve.exe	dxxretr.exe
retrieve2.exe	dxxretr2.exe
retrievec.exe	dxxretrc.exe
shred.exe	dxxshrd.exe
tests2x.exe	dxxgenx.exe
tests2xb.exe	dxxgenxb.exe
tests2xc.exe	dxxgenxc.exe

XML エクステンダーの置換用サンプル・プログラム (UNIX)

旧プログラム (使用しないでください)	新プログラム (これを使用してください)
insertc	dxxisrt
retrieve	dxxretr
retrieve2	dxxretr2
retrievec	dxxretrc
shred	dxxshrd
tests2x	dxxgenx
tests2xb	dxxgenxb
tests2xc	dxxgenxc

サンプル sqx ファイルと連携した新規サンプル・プログラムの使用

これらのサンプル・プログラムのうちの一部のサンプルは、製品に付属しています。そのようなサンプルから新規の実行可能ファイルを作成する場合、

¥SQLLIB¥samples¥db2xml¥c¥ ディレクトリーから ¥SQLLIB¥bin¥ ディレクトリーに新規のファイルをコピーしてから、上記の表に従って名前を変更したうえで追加コピーを作成します。

パーティション・データベース環境内の XML エクステンダー

XSLT ユーザー定義関数は、パーティション・データベース環境ではサポートされていません。

パーティション・データベース環境で XML を使って作業すると、データは複数の物理ノードに分けて分割されます。その場合のデータ配分は予測不能です。この種の環境での作業時には、必ず以下のようにする必要があります。

- UDF 内では XMLFile ではなく、XMLVARCHAR または XMLCLOB データ・タイプを使用します。
- UNIX または Windows オペレーティング・システムを使用する場合、XML ファイルをファイル・サーバー上に保管してから、そのサーバーを各マシンにマウントまたはマップして、どのマシンからアクセスされてもそのファイルが常に同じパスを保つようにします。
- インスタンスを所有するコンピューター上に DB2 をインストールするときに、応答ファイルを作成します。インストールの残りの部分では、その応答ファイルを使用します。そうすれば、どのマシンでも必ず同じコンポーネントがインストールされて、同じやり方で構成されることとなります。
- -r オプションを使って **enable_column** コマンド内にルート ID を指定して、どの表データでも一貫した区分化キーが使われるようにします。

追加情報

Unicode サーバー動作の変更

バージョン 7 では、Unicode サーバーは接続時にアプリケーションによってグラフィック・コード・ページを無視し、UCS2 Unicode (コード・ページ 1200) の使用を想定しました。バージョン 8 Unicode サーバーは、クライアントによって送信されたコード・ページを使用します。

SQLException.getMessage() 使用時に全メッセージ・テキストが戻されない

デフォルトでは、DB2BaseDataSource.retrieveMessagesFromServerOnGetMessage プロパティは使用できません。このプロパティを使用可能にすると、標準の JDBC SQLException.getMessage() への呼び出しはすべて、サーバー側のストアード・プロシージャを呼び出し、読み取り可能なメッセージ・テキストにエラーがないか検索します。デフォルトでは、サーバー・サイドのエラーが発生したときに全メッセージ・テキストがクライアントに戻されるわけではありません。

プロプラエタリー・メソッド DB2Sqlca.getMessage() を使用すれば、完全にフォーマットされたメッセージ・テキストを検索できます。SQLException.getMessage() メソッドの呼び出しによって作業単位が開始されるのは、retrieveMessagesFromServerOnGetMessage が使用可能になっている場合のみです。DB2Sqlca.getMessage() メソッドへ呼び出しを行うと、ストアード・プロシージャが呼び出されてから、作業単位が開始されます。フィックスパック 1 より前では、DB2Sqlca.getMessage() メソッドを使用すると例外がスローされることがあります。

IBM DB2 汎用 JDBC ドライバー

IBM DB2 汎用 JDBC ドライバーでは、HP のデフォルト文字セット roman8 で作成されたデータベースには接続できません。汎用 JDBC ドライバーを使用するすべての

SQLJ アプリケーションおよび JDBC アプリケーションは、別の文字セットで作成されたデータベースに接続する必要があります。ご使用の LANG が "C" または "roman8" ロケールに設定されている場合、これを対応する ISO ロケールに変更する必要があります。たとえば、ご使用の LANG が de_DE.roman8 であると、次のようにして de_DE.iso88591 に変更してください。

```
export LANG=de_DE.iso88591
```

DB2 SQLJ および JDBC サンプル・プログラムを汎用 JDBC ドライバーで実行するには、次のコマンドを使用してサンプル・データベースを作成することができます (この例では、米国英語の ISO ロケールを使用)。

```
export LANG=en_US.iso88591
db2 terminate
db2samp1
```

サンプル・データベースがすでに存在している場合、このコマンドを実行する前にドロップしておく必要があることに注意してください。

UNIX および Windows オペレーティング・システムでの Java 関数およびルーチン

JVM における制約事項が原因で、Java ルーチンが NOT FENCED と定義されていても、FENCED THREADSAFE と定義されているものとして起動されます。NO SQL を指定されて、さらにパラメーター・スタイルの GENERAL または GENERAL WITH NULLS も指定されて定義された Java UDF またはメソッドは、パラメーター定義内で LOB ロケータを使って定義されると機能しません。LOB LOCATORS ではなく、LOB パラメーターを使用するためには、この関数を変更する必要があります。

翻訳版の MDAC ファイルが最初にインストールされていない場合に DB2 V8.1 のすべての各国語版で使用される英語の Microsoft Data Access Components (MDAC) ファイル

各国語版の DB2 をインストールする前に、各国語版の MDAC 2.7 をインストールしていない場合、DB2 は英語の MDAC ファイルをデフォルトでインストールします。これによって、オペレーティング・システムが英語版でなくても、Windows ODBC Data Source Administrator パネルが英語で表示されることとなります。この問題を修正するには、『MDAC 2.7 RTM - Refresh』バンドルを Microsoft の Web サイト http://www.microsoft.com/data/download_270RTM.htm からインストールすることができます。インストールする言語を選択し、必要な実行プログラムをダウンロードして実行します。これは翻訳版の ODBC Data Source Administrator ファイルをインストールするものです。

AIX オペレーティング・システムでの中国語 (簡体字) ロケール

AIX では、中国語 (簡体字) ロケールにバインドされたコード・セットが変更されています。

- AIX バージョン 5.1.0000.0011 以上
- AIX バージョン 5.1.0 (保守レベル 2 以上を適用)

GBK (コード・ページ 1386) から GB18030 (コード・ページ 5488) への変更。DB2 UDB for AIX は GB18030 コード・セットではなく GBK をサポートするので、DB2 での Zh_CN ロケールのデフォルトのコード・セットは ISO 8859-1 (コード・ページ 819) になりますが、操作によっては、このロケールのデフォルトの地域はアメリカ合衆国 (US) にもなります。

この制約事項に対する対処法として、以下の 2 通りのオプションがあります。

- ロケールのコード・セットを GB18030 から GBK にオーバーライドし、地域を US から China (この地域 ID は CN、地域コードは 86) にオーバーライドすることができます。
- 別の中国語 (簡体字) ロケールを使用することができます。

最初のオプションを使用することにした場合、以下のステートメントを発行します。

```
db2set DB2CODEPAGE=1386
db2set DB2TERRITORY=86
db2 terminate
db2stop
db2start
```

2 番目のオプションを使用することにした場合、ロケールを Zh_CN から ZH_CN または zh_CN に変更します。ZH_CN ロケールのコード・セットは Unicode (UTF-8) であるのに対して、zh_CN ロケールのコード・セットは eucCN (コード・ページ 1383) です。

オンライン・ヘルプの修正および更新

SQL ストアード・プロシージャの C 環境をデベロップメント・センターで構成

サーバー上の DB2® for Windows® で作業を行っており、Visual C++ コンパイラーを使用している場合は、SQL ビルド設定を構成する必要があります。SQL ビルド・オプションを構成するまで、SQL ストアード・プロシージャをビルドすることはできません。

デベロップメント・センターのデータベース接続プロパティ・ノートブックを使用して、SQL ビルド設定を構成します。

SQL ストアード・プロシージャ用に C コンパイラー環境を構成するには、以下のようになります。

1. ノートブックの SQL ビルド設定ページで、SQL オブジェクトのビルドに使用したいコンパイラー環境を指定します。
 - 「リフレッシュ」をクリックします。
 - 「コンパイラー環境」で、Windows サーバー上の VC98¥BIN¥VCVARS32.BAT ファイルのロケーションを入力します。
2. 「OK」をクリックして、ノートブックをクローズして変更を保管します。「適用」をクリックすると、変更は保管され、プロパティの変更を継続できます。

2 Hummingbird Exceed を使ったデベロップメント・センターへのアクセス時のビュー一連結の使用可能化

2 Hummingbird Exceed を使って UNIX 上のデベロップメント・センターにアクセスする
2 場合に、デベロップメント・センター内のタイトル・バーのドラッグによってビューの
2 移動と連結を行えるようにするには、先に XTEST 拡張機能バージョン 2.2 を使用可能
2 におこななければなりません。

2 XTEST 拡張機能を使用可能にするには、次のようにします。

- 2 1. 「スタート」メニューで「プログラム」->「Hummingbird Connectivity 7.0」
2 ->「Exceed」->「XConfig」を選択します。「XConfig」ウィンドウが開きます。
- 2 2. オプション: パスワードの必要な構成の場合、XConfig パスワードを入力します。
- 2 3. 「プロトコル」アイコンをダブルクリックします。「プロトコル」ウィンドウが開
2 きます。
- 2 4. 「X 規格合致試験の互換性 (X Conformance Test Compatibility)」チェック・ボ
2 ックスにチェックを付けます。

- 2 5. 「プロトコル」ウィンドウ内の「拡張機能... (Extensions...)」ボタンをクリックし
- 2 ます。「プロトコル拡張機能 (Protocol Extensions)」ウィンドウが開きます。
- 2 6. 「拡張機能の使用可能化 (Enable Extensions)」リストで、「XTEST(X11R6)」チェッ
- 2 ク・ボックスを選択します。
- 2 7. 「OK」をクリックします。

2 デベロップメント・センターのヘルプでの Microsoft Visual Studio .NET アドイン

2 の情報の更新

2 『デベロップメント・センターについて』ヘルプ・トピックでは、用意された開発環境

2 アドインのリスト内の新規の Microsoft Visual Studio .NET アドインに関する情報が記

2 載されていません。以下に、Microsoft Visual Studio .NET 開発環境においてデベロッ

2 プメント・センター機能をサポートする .NET アドインについての解説が述べられてい

2 ます。

2 Microsoft Visual Studio .NET 開発環境用の DB2 Development Add-In:

2 DB2 Application Development Client の新コンポーネントに、.NET フレームワーク・

2 バージョン 1.0 の Microsoft Visual Studio .NET 用の IBM DB2 Development Add-In

2 があります。このアドインは Visual Studio .NET の IDE を拡張して、DB2 .NET

2 Managed Provider ならびに DB2 サーバー側開発サポートを用いる密接に統合された

2 DB2 アプリケーション開発サポートを実現します。Microsoft Visual Studio .NET で利

2 用できるこのアドインを使って、以下を行うことができます。

- 2 • 拡張スクリプト生成ウィザードを使って新規の IBM プロジェクト・フォルダーから
- 2 DB2 固有のデータベース・プロジェクトを開発する。
- 2 • 新規の IBM Explorer 内で DB2 データ接続を使って DB2 カタログ情報を探索す
- 2 る。
- 2 • DB2 表/ビュー列およびプロシージャ/関数パラメーター用に拡張されたインテリジ
- 2 エンス・フィーチャーを利用する。
- 2 • ドラッグ・アンド・ドロップを使用するウィンドウ・フォーム用の ADO.NET コード
- 2 を生成する。
- 2 • プロパティのカスタム・エディターとウィザードを使用して DB2 Managed
- 2 Provider オブジェクトを構成する。
- 2 • さまざまな DB2 開発センターおよび管理センターを起動する。
- 2 • 既存の動的ヘルプ・ウィンドウからアドインのヘルプを表示する。

2 Microsoft Visual Studio .NET データベース接続用の DB2 Development Add-In は、

2 DB2 .NET Managed Provider と ADO.NET を使って管理します。

2 バージョン 8.1.2 への DB2 XML エクステンダーの移行

2 バージョン 7 のフィックスバックからの移行の場合、バージョン 8.1.2 へのアップグレードにどのような変更内容が関与するかを確かめるには、バージョン 7 のフィックスバックの各リリース情報を参照してください。新規のフィックスバックにはいずれも、それ以前のフィックスバックの更新がすべて入っています。

2 旧バージョンからバージョン 8.1.2 に DB2 XML エクステンダーを移行するには、次のようなステップを行います。

2 1. DB2 コマンド行から次のように入力します。

```
2 db2 connect to database_name  
2 db2 bind dxxinstall%@dxxMigv.lst
```

2 *dxxinstall* は、DB2 のインストール先のディレクトリー・パスです。

2 2. DB2 コマンド行から次のように入力します。

```
2 dxxMigv database_name
```

Java ルーチンをデベロップメント・センターでコンパイル可能にするパスの設定

デベロップメント・センターは、デベロッパー・キットのバージョンをインストールするロケーションがわからないと、Java™ ルーチンをコンパイルできません。デフォルトのロケーションは、デベロップメント・センターが最初に開始されたときに、`$HOME/IBM/DB2DC/DB2DC.settings` ファイルに書き込まれます。これらを、`$USER.settings` ファイルにコピーし、Unicode エディターで変更するか、あるいはデフォルト・ロケーションにあるデベロッパー・キットのディレクトリーへのシンボリック・リンクを作成することができます。

Runstats ダイアログ - 更新された到達情報

Runstats ノートブックを開くには、以下のようにします。

1. コントロール・センターで、表フォルダーに達するまでオブジェクト・ツリーを拡張します。
2. 表フォルダーをクリックします。存在する表が、内容ペインに表示されます。
3. 統計を実行したい表をすべて右マウス・ボタン・クリックし、ポップアップ・メニューから「統計の実行」を選択します。Runstats ノートブックが開きます。

Spatial Extender - 索引アドバイザー使用時の要件

ANALYZE 文節では、USER TEMPORARY 表スペースの使用が必要です。ANALYZE 文節が必要な場合、索引アドバイザーを使用するために、表スペースに USE 特権がなければなりません。

Java ストアード・プロシージャのビルド・オプションをデベロップメント・センターで指定

ストアード・プロシージャ・プロパティ・ノートブックを使用して、Java ストアード・プロシージャのビルド時に使用されるコンパイル・オプションを指定します。

これらのステップは、ストアード・プロシージャ・プロパティの変更に関するタスクのうち、より大きな方のタスクの一部です。

ストアード・プロシージャのビルド・オプションを指定するには、以下のようにします。

1. ストアード・プロシージャ・プロパティ・ノートブックの「ビルド (Build)」ページで、ストアード・プロシージャのビルドのコンパイル・オプションを指定します。使用可能なオプションについての情報は、コンパイラーのドキュメンテーションを参照してください。
 - a. 「プリコンパイル・オプション」フィールドに、ストアード・プロシージャのビルド時に使用したい DB2 プリコンパイラー・オプションを入力します。パッケージ名は、7 文字以下でなければなりません。
 - b. 「コンパイル・オプション」フィールドに、ストアード・プロシージャのビルド時に使用したいコンパイラー・オプションを入力します。
2. 「OK」をクリックして、ノートブックをクローズして変更を保管します。「適用」をクリックすると、変更は保管され、プロパティの変更を継続できます。

付録. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032 東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。 IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他のオペレーティング環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのもと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお問い合わせください。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームの

アプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	LAN Distance
AISPO	MVS
AIX	MVS/ESA
AIXwindows	MVS/XA
AnyNet	Net.Data
APPN	NetView
AS/400	OS/390
BookManager	OS/400
C Set++	PowerPC
C/370	pSeries
CICS	QBIC
Database 2	QMF
DataHub	RACF
DataJoiner	RISC System/6000
DataPropagator	RS/6000
DataRefresher	S/370
DB2	SP
DB2 Connect	SQL/400
DB2 Extenders	SQL/DS
DB2 OLAP Server	System/370
DB2 Query Patroller	System/390
DB2 Universal Database	SystemView
Distributed Relational Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
iSeries	zSeries

以下は、他社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Intel および Pentium は Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group がライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名などはそれぞれ各社の商標または登録商標です。



Printed in Japan

日本アイ・ビー・エム株式会社

〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12